慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウーヴェ・ヨーンゾンのJahrestageにおける話者たちの位置とその語りの焦点
Sub Title	Über die Stelle und Fokussierung der Erzähler in ,,Jahrestage" von Uwe Johnson
Author	江面, 快晴(Ezura, Kaisei)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.26 (2009. 3) ,p.1- 11
JaLC DOI	
Abstract	Eine der größte Charakter vom Uwe Johnsons literarisches Meisterwerk ,,Jahrestage" ist die plötzliche Vermischung der Fokussierung der Erzähler. Diese scheinbare Familiengeschichte des zwanzigsten Jahrhunderts hat manche Meta-Erzählebene, die andere Romanen niemals gehabt haben. Die Hauptfigur Gesine Cresspahl ist keine einfache Erzählerin der Geschichte vom Exil, sondern die erzählende Erzählte. Auf dieser verdoppelten Erzählsituation steht auch der Autor Johnson selbst. Er schreibt und erzählt als eine erzählte Figur wie die Figuren in seinen eigenen Roman. In diesem Aufsatz wird diese Struktur der Erzählebene als ein Versuch der Absorbierung der zeitgenössischen Wirklichkeit des Erzählers analysiert. Mit der Unterscheidung zwischen Ich-Erzähler und Er-Erzähler und mehrere Zwichenstücke versteht man die Absicht der Verwirklichung der Vergangenheit der wirklichen und erfundenen Erzähler. Diese Analyse erklärt die zwei merkwürdigsten Beispielen der Vermishcung der Erzählebene am Anfang und am Ende des Romans. Damit ist es klar, warum mit dieser fragmentarischen Erzählmethode die einheitliche Erzählung geführt werden kann. Durch die einheitliche Stimme der Verwaltung von mehreren Erzähler der Geschichte im Hintergrund des Romans kann es verstandlich analysiert werden. Da der Autor Johnson beschreibt sich selbst auch als ein Erzählte, kann der Roman noch mehrere Vielschichtigkeit haben, und diese Vielschichtigkeit versichert nicht nur die Polifonie der Stimmen, sondern die Objektivität der Stimmen.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper

URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20090331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウーヴェ・ヨーンゾンの Jahrestage における話者たちの位置とその語りの焦点

江面快晴

1．序

ウーヴェ・ヨーンゾンは 1934 年にポンメルンの小都市カミーン（現ポーランド領カミェン・ポモルスキ）に生まれ、戦後故郷を離れて旧東ドイツ・旧西ドイツ・アメリカ・イギリスを転々と移住しながら作家として活動した。そのライフワークというべき 1800 ページを超える大作 Jahrestage – aus dem Leben von Gesine Cresspahlは 1970 年から 1983 年まで四部に分けて断続的に発表されている。この作品の主題は作者ウーヴェ・ヨーンゾン自らと似た出自をもつ女性ゲジーネの 1967 年 8 月から 1968 年 8 月まで一年間の記録の形を借りてその母ルイーゼ・主人公ゲジーネ・娘マリーの三世代に及ぶ家族史を振り返って物語るものであり、同時にその語りの時点における時事問題などもその語りの中に取り込んでいく試みである。

極度に信心深い母ルイーゼや政治的イデオロギーを問われ続ける父ハインリヒ、家族の歴史に対する好奇心に満ちた娘マリーなど、その魅力的な登場人物たちが繰り広げる物語には大河的な面白さがある。特に世界史的マクロの視点と個人史というミクロの視点の対照性が興味深く、読者を引き込む作品である。しかし Jahrestage の文学史上注目すべき点はその物語の魅力だけではなく、むしろその語りの形式の冒険的な新奇性と読者を混乱させかねない不確定性にある。物語っている主体はしばしば恣意的にぼかされ、多層化され、あいまいさの中で読者に自らの位置に対する問いを半ば強制する。この多層化された語りの構造の中でいかにして物語は進行していくことができるのか、この手がかりとなるのがその多層性を明示する作中におけるいくつかのメタ対話である。ここでは「同志小説家

Genosse Schriftsteller」としてしばしば登場するゲジーネの共同作業者としての作者、または登場人物ヨーンゾン[1)]の存在に焦点をあわせてその多層性の分析を試みる。

２．１　話者の位置

この物語の中心は、タイトルにある「生活から」に従って考えれば、一義的にゲジーネであるように思われる。多少奇妙に思われるのは、日記の形式をとっているにも関わらずしばしば三人称でゲジーネが描かれることである。これは視点の混乱のように思われることだが、これを日記と記録・報告を兼ねたような客観的記述姿勢ととらえることで、読者にとっての合理的な解釈の余地が生まれる。しかし重要な点は三人称がそれで完結するのではなく、急に、恣意的に思われるような場面で一人称に転換するということである。小説の最初の数ページ、この日付のない 7 － 10 ページでは最も重要な、ゲジーネとヨーンゾンの間の最初の差別化・同定が同時に行われている。この範囲における小説の進行は、ゲジーネ・クレスパールの一人称で語られていない。作者ウーヴェ・ヨーンゾンはここで自らの作家としての属性を、のちにゲジーネと同じ語りレベルで小説を進行していく共同作業者として、文学的に彼女を支える作家として強調しており、ここからのちの同志小説家が構成されていく。

２．２　登場人物ヨーンゾンの位置

まず読者は、日付のない部分の叙述を行い、同時に文学的記述の対象として創造された話者としての作家ヨーンゾンを受け入れることになる。この役割はすでに 9 ページにおける対話・または対話の試みに、それに続く部分で幾度も繰り返される 1967 年と 1968 年ニューヨークにおける語り状況におけるのと同様に、異化されながら中断され、そして再び受け入れられている。1967 年 8 月 21 日、すなわち日付のある最初の記述における、

---

1) Jahrestage にはしばしば登場人物として作者ヨーンゾンが登場するが、本稿においては作中のヨーンゾンを登場人物ヨーンゾン、現実の作者を作者ヨーンゾンと呼んで区別する。

ゲジーネによって焦点化され彼女から観察された状況と話題は、読者に対して表明された Jahrestage における語り形式の可能性への追及としてさらにはっきりさせられていく。変わらずくりかえされていく読者の指標としての „ich stelle mir vor“ は、ゲジーネと同志小説家との共同作業の最初の試みとして見ることができる。この二重の一人称による矛盾した状況は Jahrestage の、この小説のために作業する二人のとりきめという装置から発生している。この状況は、話者である登場人物の一人称の、ゲジーネの話者としての立場、ここでは一人称としての認識範囲を持ったゲジーネから明らかに外れたものとゲジーネに一義的に帰することができる語り、つまり文学作品における登場人物としての自意識と伝記的な背景をもった語りとの特徴的な揺れ動きとして表すことができる。

２．３　話者ゲジーネとの位置と同志小説家との関係

この話者としてのゲジーネに明確に表れている作中人物としての特性は、物語の中で作者によって操られているという印象がほとんどなく、あたかも自律的にふるまっているかのように見える点である。ここで作者ヨーンゾンは各々の架空の人物とそこに付随する結果におけるこれまでの出来事を通じた小説の展開の完結性にそのさきの動きを自然に従わせているように思われる。小説を展開していく話者はゲジーネとのとりきめによって動いており、この契約という関係は作者ヨーンゾンのフランクフルトにおける講演において下記のように説明されている。

> Es war eine Verständigung und eine Prüfung in einem, sie konnte die verlangen von jemand, der fortan in ihrem Namen schreiben wollte, für sie und an ihrer Stelle. Das wurde nun kenntlich als der Vertrag über den Auftrag, mit ihr als Generalanwalt für alle Personen und ihrem unbedingten Vetorecht.[2)]

---

2) Johnson, Uwe: „Begleitumstände. Frankfurter Vorlesungen“, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1980, S424

ここで「それ以降も彼女の名前で、彼女のためにその位置にあって書こうとする誰か」として描かれている人物はこのとりきめの下に自らについて記述しその人生で起こったことを物語る人物のことを小説として書き出していかねばならない。この作業には感覚、状況、思考といった諸々の他者の条件を、一人の男性の立場から女性の意識について書かねばならないという潜在的な困難を抱えており、それでもこの長編小説の進行上、文学的な確信を持って移し替えられていかねばならない。このようにして作者ヨーンゾンの Jahrestage という企画のために用意された下位自我ともいうべき同志小説家は、語りを行う主体の位置に合わせて、ゲジーネ・クレスパールという特殊な体験水準を書き出すことになる。

これこそは Jahrestage の最初の日付を伴った記述、1967 年 8 月 21 日の部分にまさしく描かれている通りである。文学的登場人物ゲジーネ・クレスパールを観察するということは、すなわちいかに彼女が自らに適した状況でふるまうか、というイメージを持つことであって、それがのちには視点を登場人物に内包させるという試みにつながった[3] と作者ヨーンゾンは先述の講演録に続く部分において述べている。

この、„ich stelle mir vor“ という通奏低音を持った創造と構成は最初、ごく普通のゲジーネの容姿の描写から始まるが、これは語りの複雑さが増してくるにつれて同志小説家のイメージは文学的人物としてのゲジーネの個人的伝記的な状況に移行していく。このようにしてゲジーネに矛盾なく受け入れられた習作はさらなる契約の履行をもたらす。読者に対してはこの作品内共同作業の文学的な進行方法が説明されたことになる。このため、これ以降の記述においては契約に際する誓言のようにひびくこの「ich stelle mir vor」がわざわざ前面に現れることはなくなる。この了解について Durzak は対談における次のようなヨーンゾンの発言を報告している。

> Hier in den „Jahrestagen“ habe ich von der zugegebenermaßen erfundenen Person quasi den Auftrag oder ich habe mit ihr den Vertrag, hier ihr Leben wiederzufinden und aufzuschreiben in einer Form, die sie billigen würde.[4]

---

3)Ebd.

このようにして話者の立場は読者に示された形になるが、これよりもさらに読者を混乱させるのが、人称で示されるわけではない再度の話者の急激で読者に対する断りない変化である。第一巻の中ほどにおいて既に次のような対話が見られることに注目せねばならない。

Wer erzählt hier eigentlich, Gesine?
Wir beide. Das hörst du doch, Johnson.[5)]

この直前の場面においてウーヴェ・ヨーンゾンは作中人物としてニューヨークのアメリカユダヤ人協会で講演を行っているのだが、日記におけるその記述の直後にはこのように、話者ゲジーネが娘マリーに対して応答している中で「聞いているのでしょう？ヨーンゾンさん」と呼びかけている。娘マリーの「誰が話を作っているの？」という問いかけも十分奇妙に感じられるが、作者の名前が突然持ち出されたこの場面で、読者は語りの視点ばかりでなく焦点化のレベルが混同されたことに対して混乱してしかるべきである。

２．４　話者としての作者≒登場人物ヨーンゾンの位置

作者ヨーンゾンは実際にこの講演を行っているのだが、ヴィシャーによるとヨーンゾンはこの出来事を明かすことによって、この小説内仮構とそれに続く物語作者としての役割分担を示し、自伝的な小説としての批判を無効化することに役立てている[6)]という。「ミスター・ヨーンゾン」という呼びかけはこの箇所に見られる 2 回だけにとどまっており、同志小説家

---

4) Durzak, Manfred : Dieser langsame Weg zu einer größeren Genauigkeit. In: Ders., Gespräche über den Roman. Formbestimmungen und Analysen. Frankfurt am Main , Suhrkamp, 1976, S429

5) Johnson, Uwe: Jahrestage. Aus dem Leben von Gesine Cresspahl, Frankfurt am Main 1988, S.256, im Folgenden mit der Sigle „JT“ zitiert.

6) Vischer. Sabine. A.: „Zwischen Ende und Anfang – Zur Funktionalen Verträge in der Struktur von Johnsons „Jahrestage“” in : Internationales Uwe-Johnson-Forum”

としてはたびたび現れるものの、その後登場人物ヨーンゾンの存在がこの語り手たちの二重性を明示的に表す部分はない。しかしこの呼びかけによってヨーンゾンが作中人物のレベルにおりてきたことは語り構造の分析にとって重要である。読者はまず、この登場人物ヨーンゾンから同志小説家の転換によって混乱させられる。しかし話者である同志小説家の存在は、この Wer erzählt eigentlich? という問いかけの前後に見られる現実の存在と重なりあい名指しされた作家≒登場人物ヨーンゾンの存在とそれを目撃した証人としてのゲジーネの記述が交錯することによって複雑さの度合いを増している。誰が話しているのか、という疑問はまさに読者の疑問であって、それに対する回答、「私たち二人よ」によって読者は作者≒登場人物ヨーンゾンが行った講演の聴衆としてのゲジーネがその中で完結した存在としての二人に登場人物兼話者として「最高度の協力者」という地位を与えていることを読み取ることができる。[7] またヨーンゾンは 1971 年のゲオルク・ビュヒナー賞受賞講演においても „Die Verwendung von „Wir“ an einer Stelle, da die erste Person Einzahl stehen sollte, bedeutet hier lediglich: der Verfasser, Gemeinschaft mit seinen Personen“[8]と述べており、このことも同志小説家の話者としての位置を他の登場人物と並列的な位置に置こうと意識している様子がうかがえる。つまり „Wir beide“ というフレーズはこの架空の話者同志小説家とゲジーネの二人を指すことによって、この状況がヨーンゾンによって全てを見通す立場から書かれているのではないことを示す狙いがあり、現実の読者がこの講演という状況を通じて、この小説内の架空の登場人物ヨーンゾンではなく誰が語っているのかという問いに対す

Band4. 1996. Peter Lang. S84

7) このことは、ヨーンゾンも翻訳に協力した英語版において *„We both are. Surely that's obvious, Johson.“* (Uwe Johnson: „Anniversaries. From The Life of Gesine Cresspahl. Translated by Leile Vennewitz. New York und London: Harort, Brace Jovanovich, 1975, S.169)と書かれており、doch が Surely, obvious と訳されていることからもよくわかる。

8) Uwe Johnson: Rede anläßlich der Entgegennahme des Georg-Büchner-Preises 1971. In : Büchner-Preis-Reden 1951-1971. Mit einem Vorwort von Ernst Johan. Stuttgart 1972, S.224

るヒントを受け取ることになる。

3．話者の位置の恣意的な混同

したがって、もしメタのレベルに作者がとどまっていられる限りは、作者の名前が作中に登場しようとも作者は作品から切り離された位置に留まることが可能である。この奇妙な問いかけと応答を見る限り作者としてのヨーンゾンが登場人物から話者として直接名指しされていると考えるのが最も自然である。つまり、ここでは語る者話者と語られる者登場人物たちとの位置関係は唐突に混同されている。このような混同の最もはっきりした例の一つが、物語のほとんど最後の部分に現れる次の場面である。

> Seit dem Besuch in Barlachs Haus am Inselsee von Güstrow hatten die Schülerinnen Gantlik und Cresspahl eine Verabredung mit einander, eine Heimlichkeit. welch Anblick mir möge gegenwärtig sein in der Stunde meines
>
> *Es ist uns schnuppe, ob dir das zu deftig beladen ist, Genosse Schriftsteller! Du schreibst das hin! Wir können auch heute noch aufhören mit deinem Buch. Dir sollte erfindlich sein, wie wir uns etwas vorgenommen habe für den Tod.*
>
> Sterbens. Wir vertrauten einander etwas an über die Unentbehrlichkeit der Landschaft, in der Kinder aufwachsen und das Leben erlernen.(JT1822)

ゲジーネとその旧友アニータがグストロウを訪れ、その風景の美しさに感銘を受けているこの部分では、ひとつの記述の文の中に別の文、しかも別の語りレベルからの記述が割り込んでくるという物語の一般的な形式から外れた語りが見られる。

ここで読者が思い知らされるのはもはやこれまで知られているどの物語形式からもこの長編小説が外れてしまっているということである。ミメーシスのような現実世界における物語形式の枠を用いてこの構造を理解することはできないということである。物語られている状況は、ただ架空の状況というのみならず非現実的なものになっている。つまり、すでに話者の

声を一義的に話者のものに帰することができないという点でこの部分は現実の物語状況とは似ても似つかないものになっているのである。この外部記述的—異質記述的な声はゲジーネとアニータ両方について、内心の秘密についてさえも知って記述しており、明らかに焦点化ゼロの位置から物語っている点と、語られた時間と語る時間との間の時制の違いによって対象に対してはっきりした距離を保っている、つまり対象に対して過去形を用いているという点、この二点で明確な焦点をもって物語を進行している。しかし、一つの文の中で、その記述の中にもう一つの声が割り込んでくるのであり、その声は内的焦点化による、内部記述的—同質記述的なものである。つまり一人称の視点 mir および wir を含むものであり、自らの死を仮定することのできる立場からの語りである。しかし mir から uns に唐突に移行したこの声もまた、さきの焦点化ゼロの視点による語り進行の主体を作者または同志小説家に一義的に帰することができないのと同様に、単純にゲジーネに帰することができない。さらにはこの焦点の非明瞭化にはこの視点混在だけではなく、もう一つの要素も貢献している。つまりブロック体で記述された部分に対して斜体で記述された部分が混入してきていることであり、しかも統語法的にありえない部分に割り込んでくることである。もし内部記述的—同質記述的語りの中に入り込んだこのモノローグが論理的な無理のないものとして受け取ることができれば一読してさしあたりこの部分は、心内文、モノローグとして受け取ることも可能だろう。その予測に反して、斜体で示された部分の内容は抗議の意味合いを含んでいるものであり、これが口に出して話されたものであるということを感じさせるが、まだ一人の人物によって発語された直接の発言であると決定することはできない。これは割り込み部分の語られた時間が現在形にずれていることによって示されており、この時制のずれが視点の一義化を妨げているということができる。

ここで確かになってくるのは語りの時点すなわちこのグストロウへの訪問が過去のものとなっている 1968 年現在の時点において語っている第三の声であり、割り込み部の直後において唐突に Wir と名乗っている視点の存在である。この存在はしかし、同志小説家を第一の声の主として考える場合、この同志小説家が全く外部記述的—異質記述的な記述を行う主体で

はなく、自ら記述の中に登場する話者の役割をもった登場人物の一人であるということを示すことになる。また、ここから同志小説家は登場人物ゲジーネが彼に対して報告していることを口語体で物語っているのではなく、彼女の口述を筆記しているのであるとすれば、第一の声は同時に、ゲジーネであろうと思われるグストロウを訪れている二人のうち一人のものでもあるという可能性もでてくる。

ここからさらに推測できるのは、ここに示された声の背後に、ゲジーネと同志小説家が彼らの登場しているテクストを „sein Buch“ (JT1822) として述べている、その本の著者であるような、統合的な話者が存在するだろうということである。だが、これはこの小説の根本的・支配的な物語状況ではなく、この部分に対してはもっとも合理的に解釈しうる形式であるというにすぎず、別の部分においては別の形式がよりよく当てはまるということも考えられる。さらに、この語り形式の結びつきの原因は第一の声に帰されるべきではなく、過去形を用いている限りではまた別の、第三の統合的な声と区別して時制によって明らかに他と区別される第四の声を想定すべきかもしれず、つまり人称 ich/wir ・時制現在／過去の組み合わせを考えねばならないことになる。このような視点の恣意的に見える組み合わせとその混同を考えるとき、ただ物語られた事柄のみが架空のものであるというにとどまらず、語り自体がいくつもの架空の視点を想定せねばならなくなってくる。もしこれを混同とまで言わないにしても、少なくとも視点のゆれであると解釈してこの状況を観察しなおす必要がある。

4．結論

以上の分析からは、以下の二つが明確になる。

1．語りはただ形式的な視点のゆれにとどまらず、そのゆれを語り自らがテーマとしていること。最初の例では明示的に語り手について述べられており、第二の例では暗示的に、語りの審級の急速な転換によって示されているが、これらは視点のゆれを、説明的に混同による混乱を抑えるどころか、それを明示することによってあえて意識させるほうに作用していること。

2．これによって従来のミメーシスに基づく古典的な物語作法、一人称三

人称、焦点化といった理論だけでは理解できないような、常に転換していく様々な声を通じた語りの機能を調整し可視化する統合的話者の存在を想定することによってのみ理解可能になるような、語りの内容ではなく形式の非現実性、語り状況の矛盾が生まれること。

この点から考えるべきはこの長編小説を進行している原理は語りの視点の多層性からすればほとんど不可避に思われるような断片化が見られるにも関わらず、これを統合し、調整する存在を仮定することによって語りが可能となっているということであり、この観点からのみ何が語られているのかも解釈できるだろうという予測である。

これらの観察から得られたのは、作者ヨーンゾンは自らを作品の中に取り込みながら、長編小説の進行においてその内容のみでなくその内容を語っている行為自体もまた小説化しようと試みているということであり、それは単なる声の多様さによるポリフォニーを生み出しているばかりでなく、そのような従来的な声に対するさらにメタな立場からの物語進行を目指しているということである。今後はその多層性を結びつける結節点としての、現実世界の作者をも取り込んだ統合的視点の存在をさらに明らかにしていくことがこの長編小説の多層的構造を解析していく上で必要だと思われるが、そのためには Begleitumstände や Heute Neunzig Jahr のようなヨーンゾンの、フィクションとノンフィクションをほとんど区別しない創作活動における語り行為の位置づけを調査していくことを手がかりとしていくべきである。

（慶應義塾大学大学院後期博士課程在籍）

Über die Stelle und Fokussierung der Erzähler in „Jahrestage“ von Uwe Johnson

EZURA, Kaisei

Eine der größte Charakter vom Uwe Johnsons literarisches Meisterwerk „Jahrestage“ ist die plötzliche Vermischung der Fokussierung der Erzähler. Diese scheinbare Familiengeschichte des zwanzigsten Jahrhunderts hat manche Meta-Erzählebene, die andere Romanen niemals gehabt haben. Die Hauptfigur Gesine Cresspahl ist keine einfache Erzählerin der Geschichte vom Exil, sondern die erzählende Erzählte. Auf dieser verdoppelten Erzählsituation steht auch der Autor Johnson selbst. Er schreibt und erzählt als eine erzählte Figur wie die Figuren in seinen eigenen Roman.

In diesem Aufsatz wird diese Struktur der Erzählebene als ein Versuch der Absorbierung der zeitgenössischen Wirklichkeit des Erzählers analysiert. Mit der Unterscheidung zwischen Ich-Erzähler und Er-Erzähler und mehrere Zwichenstücke versteht man die Absicht der Verwirklichung der Vergangenheit der wirklichen und erfundenen Erzähler. Diese Analyse erklärt die zwei merkwürdigsten Beispielen der Vermishcung der Erzählebene am Anfang und am Ende des Romans. Damit ist es klar, warum mit dieser fragmentarischen Erzählmethode die einheitliche Erzählung geführt werden kann. Durch die einheitliche Stimme der Verwaltung von mehreren Erzähler der Geschichte im Hintergrund des Romans kann es verstandlich analysiert werden. Da der Autor Johnson beschreibt sich selbst auch als ein Erzählte, kann der Roman noch mehrere Vielschichtigkeit haben, und diese Vielschichtigkeit versichert nicht nur die Polifonie der Stimmen, sondern die Objektivität der Stimmen.